



Title	通級生とともに
Author(s)	松田, 和典; 山田, 美佐子
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 285-287
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68219
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

通級生とともに

大阪市立市岡中学校 帰国した子どもの教育センター校

日本語・適応指導教室担当 **松田和典**

市岡中日本語教室では、初級日本語学習を進めることを第一としているが、日本語学習のみを進めることは困難で、どうしても気持ちの問題から解きほぐしていく必要が出てくる。また学習グループのメンバーを固定することは、複数の在籍校から通級してくるという性格上無理な場合が多く、毎回少しずつメンバーが入れ替わることが多い。例えば、その日のベストな組み合わせを考えて、ネパール出身(男)2名、中国出身(女)2名、ペルー出身(女)1名の5名の学習グループができた場合、出身国別に3つの小グループでもあり、漢字圏・非漢字圏の2グループでもあり、学習進度の違いで5人5様でもあり、時として1つにまとまる場合もある。一斉授業的に進めることもできるかもしれないが、まず、学習の進度が違うということと、精神的に安定していない中学生では、意欲が出なければ学習も進まないという面があり、まして異文化な外国で学校生活を送っていると、まず精神的に落ち着いた状況を作ることが重要となる。簡単に言うと、やる気が出てこなければたとえ学習経験が豊富でも学習は非常に困難となる。また、通級生の増加により、1人に手をかけられる時間もどんどん少なくなっている。

そういう状況の中、林貴哉さんが「公共サービス・ラーニング」で市岡中日本語教室に来てくださった。最初、担当者個人の人数的な負担が軽減されるという利点があるという認識であったが、日本語教室で共に過ごし、林貴哉さん、担当者、生徒たちの人間関係ができてくるに従って、違った感想を持つようになった。負担の軽減という面は大きなことではなかった。それより、まず、生徒が普段の担当者以外の人間と長期間に渡って接するという意味は大きかった。日本語教室という世界は、どうしても小さく閉ざされたものになりがちであるように思う。林さんの人間性によるところも大きいとは思いますが、生徒とのやりとりを見ていると、外部からの空気の流入

が狭い世界に風穴をあけるようで、ことばの面でも、担当者以外の日本語を聞いたり、違う角度からの説明を聞いたり、また生徒が林さんに伝えたりすることの大切さを感じた。また、担当者が受けた影響も大きかった。日々の指導に追われ、なかなか自分自身を客観的に見つめることができていなかったと実感したが、その日のレポート等を見せていただくと、自分がどのような指導をしているのかがよくわかった。また、これまでの研究活動や留学等の経験談をお聞きすることによって、新たな視点を持つことができたり、現状をどのように改良していけばよいのかのアイデアが湧き上がってくるような感じであった。例を挙げれば「学習者オートノミー」という考えである。そのまま生徒に当てはめるのは難しい面もあると思うが、何とか生徒に活用できないかと強く感じた。

林さんにはいろいろと大変な苦勞をおかけしたと思うが、共に教育活動ができて、半年間本当に有意義であった。感謝するとともに、林さんの今後に大いに期待している。応援しています！

大阪市立市岡中学校 帰国した子どもの教育センター校

日本語・適応指導教室担当 **山田美佐子**

日本語教室の担当になって4年目を迎えている。日本で働く保護者と呼び寄せられた子どもを一番多く見てきた。次は、保護者の国際結婚に伴っての来日である。子どもは日本の学齢通りか、学年を一つ下げて編入する。従って私が担当するのは、12～16歳の思春期真っ直中の子どもたちである。

本校最寄りの弁天町へは、大阪市内のどこからでも通いやすい。また、市内東部に日本語教室がないため、東成区・城東区からも受け入れている。通級生は現在37人、昨年度と今年度は特に編入が多く、担当者二人の限界を感じている。

「半夏生」は何ですか」「“切片”がわかりません」「これはどんな歌？」など、子どもから多岐にわたる質問を受ける。授業で聞いてわからなかった内容や在籍校で耳にしたことばを尋ねられるが、わかりやすい日本語で説明するのに苦勞する。知らないことは一緒に調べる。日本語教室には何でも聞

ける雰囲気がある。これは、子どもにとってよい環境だと思っている。人間関係ができると、子どもは食べ物、K-POP、三国志や漫画の話など、自分が興味のある話をするようになる。ある時、子どもは蚊の絵を描いて痒いことを訴えた。私に両替を頼むのに、5000円札1枚と1000円札5枚の絵に矢印を加えた。このような彼らの伝えたい思いや個性を大切にしたいと思っている。編入当初あいさつ程度だった子どもが、日本語をどんどん吸収していく。私は、その過程を楽しんでいる。

現在中国からの編入が一番多い。私はその子たちと心の距離を縮めたいという気持ちと自分が生徒になる楽しさから中国語講座に通っている。私は覚えた中国語を使いたくて、初対面の子どもに「初次見面。(初めまして)」と話しかける。子どもは安心して笑顔になる。ところが、その後中国語で話しかけてくるようになって困った。日本語が話せるようになるまでは、子どもは母語でしか気持ちを伝えられない。私なら日本語しか伝える手段がないのと同じだと理解した。

日本語が全くわからないという経験を子どもたち全員がしている。学年に関係なく日本語教室内の先輩が共通の言語で後輩の子どもに教える姿が見られる。そんな様子を見るたびに彼らを愛おしいと感じる。発音できない文字が並んでいる、漢字をどこから書けばいいかわからないといった段階では、子どもは自ら課題を見つけて学習するには至らない。教師は学習意欲の低い子どもにやる気スイッチを押す役割もあると思っている。慣れない日本で生活する子どもたちの現実を知り、彼らのつぶやきを拾っていききたい。子どもの不安や悩みを受け止め、支えられる教師でありたい。日本語教室担当になってから、私は以前よりことばに敏感になり、自分の発音を意識するようになっていく。日本語について知りたいこともたくさんある。指導法の工夫も必要だ。今後も自分自身の研鑽を続けたい。

公共サービス・ラーニングの目的で林貴哉さんが本校に来られ、日本語・適応指導教室のあり方を確認する機会を得た。日本語教育についての知識を深めることもでき、よかったと思っている。本校に関わられた半年間が林貴哉さんの研究の助けになれば嬉しい。今後のご活躍に期待している。今回、寄稿の機会をいただき、ありがとうございました。